ご自由にお持ち帰りください。

生涯学習 とっとり

鳥取県教育委員会発行
2016.9 長月
166

鳥取県内の生涯学習講座が満載！

ページ
1 特集
メダカを通して東郷池周辺の環境を考える
東郷池メダカの会
3 境港市傾聴委員会「だんだん」
4 とっとり県民カレッジ連携
生涯学習講座情報（9・10月）
26 連携講座 おすすめピックアップ
27 鳥取県立生涯学習センター（お知らせ）
28 「メディア21：00」運動がはじまりました！
29 倉吉市小鴨公民館「男のクラブ」
鳥取市の学習グループと交流！
31 ワールドウォークフェスタ in Tottori

『切り絵シリーズ』花回廊（南部町）

この時期、百合や秋バラが美を競う中、真っ赤なサルビアも花回廊の定番になった。
さらにここでは、見慣れたコスモスがインパクトを与えている。

絵・文：紙原 四郎 氏

メダカを通して東郷池周辺の環境を考える

東郷池メダカの会

メダカを通して、環境にやさしいまちづくりを目指して活動する「東郷池メダカの会」。会長ほか３人の方にお話しをうかがいました。

東郷池の環境の移り変わり

湯梨浜町にある東郷池。昭和 30 年代前半までは、水草漁業「モク採り」が行われていました。モクはアオコやヘドロの元となるリンや窒素成分を吸収するほか、刈り取られた水草は肥料として農業にも利用されていました。昭和 40 年代になると、人々の生活が豊かになり、生活排水による水質汚濁が問題視されるようになりました。水草が姿を消し、アオコが多発。池が悪臭を発するようになり、夏には魚が大量死するなどの問題も発生しました。

平成になると、ハード面の整備が進み、池の透明度は回復しましたが、依然とゴミが浮かび、水草の減少とともに従来いたフナやコイなども減り、ブラックバスやヌートリアなどの外来種が増え始めていました。生態系が崩れ、メダカをはじめ、生き物の種類が減少しつつありました。

ミナミメダカ ダツ目 メダカ科 メダカ属
Oryzias latipes（Temminck et Schlegel）

オス

目が体の上の方にあることから目高（めだか）の名がついたと言われる。オスは大きい平行四辺形のしりびれと、切れ込みのある背びれを持つ。研究が進み、全国の在来メダカが、キタノメダカとミナミメダカにわけられたが、鳥取県はミナミメダカの生息圏とされている。東郷池周辺の各河川の下流や、水田横の用水などに多く見られる。

偶然、公園内の水たまりでメダカを発見！

平成 11 年、環境庁（現、環境省）は、レッドリストの中でメダカを絶滅危惧Ⅱ類に指定。このニュースはマスコミにも大きく取り上げられ、全国的に話題となりました。

ちょうどその頃、東郷湖羽合臨海公園の近くの住民が、公園内にできた‘水たまり’にメダカがいるのを偶然発見！

これをきっかけに、当時の公園園長の本田 斉（ほんだ ひとし）さんの発案で、メダカを守り育てながら、環境にやさしいまちづくりを目指していこうと、当時の山本庸生（やまもとつねお）町長が会長となり、平成 11 年に個人会員 84 人、法人会員 21 団体で東郷湖メダカの会（現、「東郷池メダカの会」以下、「メダカの会」）を結成しました。

地域を巻き込んで環境について積極的に学習

結成当初は、町民全体の環境意識を高めるために、県の衛生環境研究所とタイアップ。県内外からも講師を招き、町民以外にも広く呼び掛けて、頻繁に講演会やシンポジウムを開催しました。

日本めだかトラスト協会にも加入し、他県の団体との交流を始めました。平成 15 年 6 月、「第 5 回全国めだかシンポジウムとっとり in 東郷湖」を開催。全国の野生メダカの保護に携わる関係者が集まり、水辺の環境保全について活発な意見交換を行いました。

また、このシンポジウムに向けて、メダカが発見された場所にビオトープ ※1 を整備。「メダカ遊園池」と名付けて、ここで交流会を行いました。

今は、体験活動に力をいれています！

以前は、座学を中心に勉強会をしていましたが、今は、子どもたちを巻き込んで体験活動に力を入れています。「メダカボランティアの日」や「東郷池自然環境勉強会」、町が取り組む「アダプトプログラム」※2 への参加が主な活動です。

「メダカボランティアの日」は、春と秋に２回開催。高校生ボランティアの協力も得て、町内の小学生や湯梨浜町立北溟（ほくめい）

中学校科学部の生徒と一緒に、メダカ遊園池周辺の草刈り・ごみ拾い・里山整備・ヨシの苗作りや定植、ヨシやがまの刈り取り等を行います。

特にヨシの再生には力を入れています。「以前は、ヨシが茂って、東郷池は見えませんでした。今は、公園化によって景観は良くなったけど、小魚の逃げ場や産卵場所になるヨシがなくなってね」と中前さん。「ヨシは水を浄化するからいいんですよ。でも枯れると池が汚れるから刈り取らないとね」とも。酒井さんは、「ヨシが広がればいいけど、冬場は結構波があって、護岸の前に植えていると波にさらわれて思うようにならない」と嘆きます。

東郷池の自然の素晴らしさを知ってほしい

「東郷池自然環境勉強会」では、「フナ・コイの産卵ウォッチング」、「メダカ生息地調査」、「メダカ遊園池生物生息実態調査」、「おさかな教室」、「サケの遡上ウォッチング」をします。

今年の５月に実施したメダカ生息地調査では、中前さんが講師となり、北溟中学校科学部の生徒も参加して、水生生物の「つかまえかた」を勉強しながら、東郷池周辺の水路等を調査しました。メダカのほかにも、ヤマトシジミやスジエビ、ヤゴ、ウシガエルのオタマジャクシなどの水生生物や外来生物もたくさん確認しました。

「メダカ遊園池生物生息実態調査」では、メダカ遊園池の水を全部ポンプでくみ上げて、どんな魚がいるのかを調査します。池にはメダカの他にも外来種や肉食魚もいるので駆除をし、ヘドロやフサモを除去してメダカの住みやすい環境に整えます。

「おさかな教室」は、一般の親子を募集して開催します。まずは川で魚のとり方を教えます。「今の子どもは、親が危ないからと川遊びを規制するので、魚のとり方を知りません」と酒井さんは話します。浅瀬で魚のとり方を教えると、子どもたちは 10 種類以上の魚を簡単にとってきます。そして、観察やリリースの方法なども教えます。中前さんは、「子どもたちは、地元の川に希少種の魚がいることにびっくりします。体験することで自然の素晴らしさに気づき、とても感動します。その感動はいつまでも胸に残り、自然をいつくしむ心が育まれます」と話します。

メダカ遊園池周辺の草刈りとごみ拾い

※1 ビオトープ　：動物や植物が恒常的に生活できるように造成または復元された小規模な生息空間

※2 アダプトプログラム：市民と行政が協働で進める清掃活動をベースとしたまち美化プログラム

住民の意識が確実に変わってきています！

「今、東郷池周辺では、魚の種が確実に減っている」と中前さんは話します。酒井さんは、「護岸工事や植生等、いろんな問題が関係しているけど、一番の原因は人間ですよ。人間が汚すから…」だと。

住民の意識改革を図るために、メダカの会の活動について機会を捉えて積極的にＰＲをしています。また、アダプトプログラムへの参加や他団体との連携も大切にしています。

「メダカの会の活動により、住民の意識が変わってきたと感じています」と話す井澤さんと高野さん。活動により、住民が周辺の川にも目を向けるようになると、サケが海から橋津川へ入り、卵を産むために東郷池の４河川すべてに遡上することを知るようになりました。「このような光景を見ると、大人も子どもも、ゴミなんか捨てる気持ちになりませんよね」と中前さん。

以前は、住民が捨てたゴミが川から東郷池に流れてきて、多くの浮遊物がありましたが、ほとんどなくなり随分綺麗になりました。住民に環境保全の意識が着実に根付いています。

若者を育成し、活動を継承したい

活動を始めて 17 年になります。たくさんいた会員も高齢化等により、現在、会員 32 人。そのうちの約３分の２が 60 歳以上。「今は、こういう組織に入って活動しようという若者が少なくなりましたね。呼びかけても入ってくれない。メダカの会の活動が継続できないのでは…」と酒井さんは危惧します。中前さんは、「これまでの取組のおかげで、高校生のボランティアも育ってきました。しかし、育てても大学進学や就職で県外に出て行って、なかなか帰ってきませんね」と後継者づくりの難しさを感じています。「でも、ありがたいことに、今年は一人、大学でも魚の研究をした若者が帰ってきて、メダカの会に入りました。そういう若い人がどんどん増えてくれるといいですね」と期待します。

最後にみなさんから、「東郷池周辺の環境を守り続けるために活動を継続して、どんどん情報発信していきますよ」と力強い言葉をいただきました。

「東郷湖、東郷池、どちらが本当？」と聞くと、昔からここでは、東郷池（とうごいけ）と言っているとのこと。東郷池は地域の宝。とても深い想いが伝わってきました。

東郷池でヨシを定植する様子

（問合せ先）
東郷池メダカの会事務局
（東郷湖羽合臨海公園あやめ池スポーツセンター内）
TEL（0858）32-2189

県内初！　高齢者団体による傾聴ボランティア

境港市傾聴委員会『だんだん』

60 歳以上が会員の団体「境港市ことぶきクラブ連合会」会長の門脇眞澄（かどわき ますみ）さんと、「だんだん」副委員長の足田京子（あし だきょうこ）さんに傾聴活動についてお話をうかがいました。

岡田浩さん（後列左から２番目）と「だんだん」のみなさん

高齢者団体の中に拠点を設置

高齢化社会を迎え、住民同士の支え合いが必要となっている今、傾聴ボランティアのニーズが高まり、各地で学習会が開催されています。

境港市でも、平成 25 年に境港市社会福祉協議会の主催で、「よなご傾聴しあわせの会」代表の岡田浩（おか だひろし）さんを講師に迎えて、傾聴ボランティア養成講座を開催。境港市ことぶきクラブ連合会（以下、「ことぶきクラブ」）会長の門脇さんも参加し、傾聴について深く学びました。

この講座で傾聴活動の重要性を強く感じた門脇さんは、当時、境港市には活動団体がなかったため、受講者などに声を掛け、平成 26 年 4 月、「ことぶきクラブ」の中に傾聴委員会を設置。話し相手になっていただいて「ありがとう」の想いを込めて「だんだん」と名付け、活動がスタートしました。

現在、メンバーは、70 歳代を中心に、準会員も含めて女性 10 名、男性 9 名の 19 名。最高齢は 83 歳。傾聴活動に熱心な40歳代の女性も準会員として在籍しています。

「傾聴」は「お話し相手」

門脇さんは、「傾聴という言葉は難しくて、みんなが身構えてしまいます。我々は素人ですから、‘お話し相手’という感覚で、肩の力を抜いて活動しているんですよ」と言われます。「傾聴をしている時は、相手を否定せず、うなずきと繰り返しが必要なのですが、なかなか実践が難しいですね」とも。

発足時から、境港市老人福祉センターの近くの介護施設を訪問しています。施設職員の中に会員がいて、施設側とコーディネートをし、月３回、３～４人で訪問。施設の職員が入所者の体調を見て広間に連れて来られ、そこで１時間程度傾聴をします。「基本は、１対１でお話を聴きます。高齢者同士なので、昔の歌や映画など共通の話題もあり、話をしていて共感できる部分も多く、話が弾んで、いつの間にか他の方との交流も生まれています。もちろん、中にはお話しが苦手な方もありますが、帰る頃には表情が明るく、穏やかになっておられます」と足田さん。

傾聴を終えて、施設の職員に、その日のことを報告すると、「入所者の新たな情報や想いを知ることができ、今後の介護に活かすことができるので助かる」と言われます。足田さんは、「継続して活動することで、施設の職員や入所者に喜んでいただき、やりがいがありますね」と充実した様子。

研修とメンバー同士の情報交換でスキルアップ

活動を始めて３年目。これまでに県社会福祉協議会が主催する養成講座やフォローアップ講座等にも参加しました。

今、大切にしているのは、境港市老人福祉センターで開催する月１回の定例会。ここでは、各自が活動の様子を報告し、情報交換を行っています。門脇さんと足田さんは、「傾聴をしていると、喜びも多いですが、いろいろな悩みも生まれ、不安になることもあります。アドバイザーとして岡田さんも来られて適切な指導・助言もいただけますし、みんなで話し合うと解消できて自信がつきますね」と顔を見合わせます。

今後は会員を増やすことが目標

「今、訪問施設は１箇所だけです。今後は、声が掛かれば他の施設も訪問して傾聴をしたいと思っています。継続して活動するためにも、会員を増やし、受け皿となる組織の強化も図りたいです」と門脇さん。

高齢者同士だからこそ心が通じ合い、そっと寄り添うことができる「だんだん」の傾聴活動。意欲的に学ばれ、その学びを実践へとつなげている姿に頭が下がります。

傾聴の様子

施設担当者との話し合い

メンバー募集中！！

境港市ことぶきクラブ連合会　TEL (0859) 45-6116